

川合一郎著作集

第六卷

管理通貨と金融資本

有斐閣



川合一郎著作集 6 管理通貨と金融資本

昭和 57 年 3 月 30 日 初版第 1 刷印刷
昭和 57 年 4 月 10 日 初版第 1 刷発行

定価 4,500 円

著 者 かわ い いち ろう
 川 合 一 郎

発 行 者 え ぐさ ただ あつ
 江 草 忠 允

東京都千代田区神田神保町 2~17

発 行 所 株式 有 斐 閣
 会社

電 話 東 京 (264) 1 3 1 1 (大代表)
郵便番号 [101] 振替口座東京 6-370 番
本郷支店 [113] 文京区東京大学正門前
京都支店 [606] 左京区田中門前町 44

印刷・株式会社三陽社 製本・株式会社高陽堂

© 1982, 川合和子. Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN 4-641-05326-X

刊行にあたって

川合一郎教授は、つねに基本的な理論に基礎をおき、同時に具体的な現実を鋭く見透しながら経済学の研究を進められてきた。川合教授の考え方を貫いているこの二つの方向は、著作、論稿のすべてを貫徹しているといつてよい。

この考え方は、一つには川合教授の基礎理論の重視、理論にたいする執拗な追究の態度に基礎があり、他方、現実にたいするダイナミックで鋭い感覚にもとづいている。川合教授は、この二つの態度を柔軟な思考によって結合されていた。昭和二十年代から五十年代にわたって、弛みなく続けられた著作活動には、この二つの方向が脈々と流れており、論稿はいつの場合も、十二分な清新さと明晰な分析力、また説得力をもっていた。川合教授の経済学は、借り物の議論、押し付けの理論ではなかった。そして、絶えず新しい問題意識が用意されていた。

現代の経済は、多くの重要な問題を含んでいる。世界経済は、ほとんど国を問わず共通な病理に悩んでいる。一九三〇年代の不況は生産のいちじるしい低下と大量の失業の危機であったが、現在は失業も物価騰貴もというスタグフレーションの危機である。川合教授は、最近は金融論、証券市場論の分野において、根底にある一般的な理論の正否を問う鍵としてこの問題、また財政再建をめぐる金融、証券の領域に山積している諸問題の分析に眼を向けられていた。

本『著作集』全六巻は、川合教授の業績を総括し、川合教授の理論と分析、またこれらを生み出した思考と人柄の全体を広く伝えることを目的として編纂された。主著のみではなく、時期にしたがってそれぞれ肉迫された課題にたいする透徹した分析は洩れなく収録して、川合教授の友人、門下生によって体系的に整理、配列した。読者は、改めて川合

教授の絶えざる創造的な見解に触れるとともに、複雑な経済社会を照射する基本的な視角を得られるであろう。とくに若い読者が、広い視野と新しい指針を得られることを期待している。

一九八一年八月

川合一郎著作集編集委員会

玉野井昌夫

目次

1 管理通貨と金融資本

まえがき 三

第一編

序 二つの信用論 七

——深町郁弥『所有と信用』、飯田裕康『信用論と擬制資本』——

第一章 管理通貨と金融資本 二七

——二つの「組織された資本主義」論——

はしがき 二七

第一節 管理通貨 二六

一 商業信用(三〇) 二 銀行信用(三二) 三 中央銀行(三四)

第二節 金融資本 四〇

一 資本信用(四〇) 二 株式会社(四二)

むすび 管理通貨と金融資本——二つの「組織された資本主義」論 四七

第二章 現代資本主義と信用理論

——「信用創造」から「資産選択」へ——

はしがき

第一節 金融資産の累積——政府スペンディング——

第二節 借手の利子非感応性——自己金融——

第三節 貸手分析——アベイラビリティ、銀行行動の理論——

第四節 信用創造論の地位の低下と形骸化

第二編

第三章 商業流通と一般的流通

——宇野弘藏編『資本論研究』V（利子・地代）を読んで——

はしがき

第一節 商業信用において貸し付けられるものは何か——商品か貨幣か——

第二節 銀行信用において貸し付けられるものは何か——一覧払債務か現金か——

第三節 発券集中と半官半民形態

一 発券集中（九七） 二 半官半民形態（〇八）

第四章 信用創造論と乗数論

——再生産との関連において——

五〇

五〇

五〇

六〇

六五

七二

九〇

九〇

八二

八六

九七

一三三

はしがき	一三
第一節 再生産の条件	一七
第二節 信用創造	二二
第三節 投資乗数	二六
むすび	三三
第五章 マルクス信用論と信用創造	三三
補論 宇野経済学と信用体系	四七
——岡本磐男『通貨と信用』を読んで——	
第六章 実現論なき恐慌論	五四
——宇野教授の所説への一疑問——	
補論 信用と恐慌	六〇
——伊藤誠『信用と恐慌』を読んで——	
第三編	
第七章 いわゆる「金本位制のゲームのルール」について	七五
第八章 平価切上げと小国の立場	九三
——一九七一年五月のマルク・フロートをめぐる——	
第一節 ドル	九三

第二節	マルクとフラン	一九七
-----	---------	-----

一	ドイツ(一九〇)	二一
二	フランス(100)	二二

第三節	オランダ・ギルダー、スイス・フラン、オーストリア・シリング	二〇四
-----	-------------------------------	-----

あとがき		二〇九
------	--	-----

第九章	スタグフレーションと平価政策	二二二
-----	----------------	-----

はしがき		二二二
------	--	-----

第一節	経済学者の混迷とスタグフレーション	二二四
-----	-------------------	-----

第二節	平価切上げとスタグフレーション	二三三
-----	-----------------	-----

おわりに		二三六
------	--	-----

補論	インフレーションと通貨危機	二三三
----	---------------	-----

第一〇章	現代インフレの諸側面と学説	二三七
------	---------------	-----

はしがき		二三七
------	--	-----

第一節	裸のままの財政インフレ——救済インフレ——	二三六
-----	-----------------------	-----

第二節	財政インフレから信用インフレへの形態変化	二三六
-----	----------------------	-----

一	「金融政策の復活」(三六)	二一
二	不換銀行券論争(三四)	二二

第三節	デマンドプル・インフレ論からコストプッシュ・インフレ論へ	二四五
-----	------------------------------	-----

一	アメリカの論争(三四)	二二
二	生産性変化率格差インフレーション(三五)	二三

第四節	スタグフレーション	二五八
第五節	輸入されたインフレーション	二五七
第六節	「資源不足インフレーション」	二六三
あとがき		二七一

2 新しい金融論

現代資本主義の信用構造	二七五
-------------	-----

一 自己金融とプレミアム(利益剰余金と資本剰余金)——新しい集積と集中	二七七
-------------------------------------	-----

二 信用形態の展開と多様化	二七九
---------------	-----

一 消費者信用(二六〇)	二 公信用(二六二)
--------------	------------

三 信用の機関化	二八三
----------	-----

四 金融資産(貨幣および利子請求権)の累積——資産選択と国債管理	二八六
----------------------------------	-----

信用創造論から資産選択論へ	二九一
---------------	-----

——信用論から利子うみ資本論へ——

擬制資本の金融論と貨幣数量説	二九五
----------------	-----

3 スタグフレーション

スタグフレーションとはなにか	三三三
----------------	-----

はじめに	三三
一 スタグフレーションについての諸見解	三四
二 コストインフレの登場——スタグフレーションの前段階——	三七
三 スタグフレーションの開始	三九
四 一九七三年のスタグフレーション	三九
むすび	四一
スタグフレーションと財政金融政策	四二
——フロートと「ゲームのルール」——	
補 貨幣・信用論研究三〇年	四五
解 題（一ノ瀬 篤）	三七
解 説（深町 郁弥）	三七
あとがき	三九
	（浜田博男）

1

管理通貨と金融資本

ま え が き

本書は一九七一年春から夏にかけてのヨーロッパ旅行からの帰国後ほぼ三年のあいだに執筆したものを中心として、それに関連する二、三の旧稿をつけ加えて体系的に整理したものである。

第一編(序から第二章)は、信用機構を原理的・段階的に総体として把握することにむけられ、第二編(第三章～第六章)は信用機構の核心的部分である信用創造のメカニズムに焦点をむけ、第三編(第七章～第一〇章)では金融政策やインフレーションをとり扱った。

第一章は、信用制度の体系を、「流通時間なき流通」にたいする資本の志向と、「資本の所有制限」打開への衝動との二つの基盤のうえに展開された二つの柱として整理したうえで上向し、その頂点を中央銀行と金融資本としてとらえ、そこから下方にむかつての管理通貨と金融資本というコントロール・支配の働きかけの体系として把握した。これはたんなる金融論からはなれて、一方では通貨・財政面からの市場機構を介する統制を主とするケインズ、サミュエルソンと、他方では、株式所有や貸付を通ずる直接的な支配を重視するかつてのブハーリンからガルブレイスにいたる、二つの「組織された資本主義」論の成立・分化の根拠をしめし、また「市場原理」と「計画原理」といわれる最近の比較体制論の分類基準を背後から説明するものといえる。信用の二つの地盤はたんに金融論のみにかかわるものではないことがわかる。

第二章では、近代経済学の信用論の検討をつうじて、現代資本主義における信用機構の変貌を明らかにしようとして試みた。現代の金融論は、「貨幣と銀行の金融論」から「金融資産と金融機関一般の金融論」になったといわれる事態が分析の手がかりであった。第一章では、信用機構の基底的部分をいわば縦割りにしてみたものとすれば、第二章では、国家独占資本主義段階に入って、産業資本段階の信用機構の上部に遊休資金のフローと、金融資産の厚いヴェールがかか

った状態をみえるがまさに表面から理論化した近代経済学の金融論の批判的検討をつうじて、第一章の分析結果とのあいだに連繫をつけようと試みた。この試みはまだ緒についたばかりであって今後の課題である。

第二編（第三章、第六章）では、信用現象の原理段階での集約的表現であって、第一章の核心的部分をなす信用創造現象を、商業流通と一般的流通の区別、実現の二重化という事態を基礎として、そのうえで資金節約のためにとりむずばれる商業信用が銀行信用段階に入って呈示する集約的な姿として、とらえた。「資本の所有制限」を打開しようとしてうまれる信用が原理論段階でとる集約的表現が擬制資本であるとすれば、資本が「流通時間なき流通」をめざしてとり結ぶ商業信用の集約的な姿は信用創造現象である。マルクス信用論が信用創造にとりくむのをこれまで阻止してきたのは、銀行信用の本質を、商業信用からきりはなしてなまのまの現金貸付とみたからであり、さらに掘り下げれば商業信用の商業流通面と資金融通面とをきりはなして理解したからである。第三章では、宇野弘藏編『資本論研究』V（利子・地代）の検討をつうじて信用創造を主として銀行論段階で考察し、第四章では、再生産・実現論の基礎にまで遡って信用創造現象の基底を明らかにしようとした。信用創造現象と投資乗数がともに特殊な視角からみられた再生産・実現の条件として、同根の現象であることは、金融論を経済学に拡充するてがかりをひろくものである。第五章では、マルクス経済学が何故に信用創造をとりあげえず、したがって現段階において預金通貨・信用貨幣を論理のなかに取り入れえないために金融政策・管理通貨を論ずることができないかを追跡した。これはまた同時にマルクス経済学の信用論が近代経済学の信用論を批判的に理解することができなかった理由をしめす。信用創造論は、信用論（資金の融通）、貨幣論（手形流通・貨幣節約）、再生産論（実現の二重化）さらに動態論の視角から立体的に把握されなければならないことがわかる。第六章「実現論なき恐慌論」は旧稿であって、いまからみれば稚拙なものであるが、さいきんにおける宇野派の信用論の展開は、実現面への考慮がいよいよ必要な局面に入りこんできていること、およびこの小論にたいして宇野氏がみずから示教の筆をとられ、しかもそれがその後二度にわたって著作集に収録されているので、この小論も一期においては消極的にせよ何らかの存在理由をもちえたかと思ひ、あえて収録することにした。その後における筆者の

考えの推移については、伊藤誠氏の著書の書評やスタグフレーションをとりあつた個所を参照されたい。なおこの第二編については、別稿「企業間信用膨脹の意義について」(『信用制度とインフレーション』著作集第五巻、所収)を参照されたい。第一編が基礎過程から遊離しつつある近代経済学の批判であるとすれば、第二編は現実への上向の媒介環を自ら断っているマルクス信用論の批判である。

第三編(第七章(第一〇章))には、金融政策、インフレーションに関するものを収めたが、いま読みかえしてみると、これらを通じて、国内的側面から国際的側面へのかかわりに関心がおかれるようになっていたことに気がつく。第七章は、変動相場制をとれなくなるといわれる「金本位制のゲームのルール」という表現でとらえられている事態は、どこまでが客観過程の反映であり、どこからが人為的なものであるかについて考えてみた。これは結果的には、別稿「金融政策の論理と構造」(『信用制度とインフレーション』著作集第五巻、所収)の国際的側面となっている。第八章は、貿易収支の赤字をつづけるヨーロッパの小国が西ドイツのマルク切上げに追隨して自国通貨を切り上げざるをえなくなるディレンマについて考察した。第九章は、自明のことのように言葉だけますます使われるようになりながら、理論的分析は手つかずのまま残されているスタグフレーションなる事態と、それを打開するために行なわれたニクソン新政策の持つ意義を、多国籍企業の行動を媒介として考察した。インフレーション政策の行きついたのちにうまれた賃金上昇と国際収支の壁に対する資本の本能的対応であるスタグフレーションは、理論的には商品過剰(実現困難)と資本過剰(賃金上昇)の対抗の現段階での集約的表現であり、政策的には、所得政策と平価切下げのせつばつまった要求をつきつけている。スタグフレーションは一九六九年に英米にあらわれたときには、わが国には他人事として論議されながら、いまわが国の問題になってくるととりあげられないのは奇妙である。第一〇章では、デマンドプル、コストプッシュ、さらにデマンドプルという推移・交替にあらわれている戦後インフレーション論の諸類型の変遷を、それぞれの時期における蓄積条件の変化、財政スペンディングの波の干満、独占の強化、賃金の上昇、のちには国際的側面において考察した。ドルの金交換停止、固定レート制の崩壊ののち、アラブ諸国の石油カットという政治的な行動のかたちで再燃した物価

狂騰をひきおこしたのは基本的には何によるものであるのか。資源枯渇に求めるもの、それを背景とするナシヨナリズムに求めるもの、過剰ドルの換物化という貨幣側要求に求めるものなど、いくつかの見解があるが、これらをもっと大きな視角から位置づけたものはまだないようである。インフレ論は現代資本主義論そのものとなってきた。

金融論の諸分野の小路をあるきまわってきたとある街角にでたとき、どこかでみたようなところだと思つて考えると、それは経済原論の大通りでならつてきた諸規定を裏側や下方からのぞいていたというようにことがふえてきている。資本蓄積の運動は条件の変化とともに、いろいろな側面や断面を前面におしだすから、固定的な発想法にとらわれていると変化する現実にはフォローすることができなくなる。金融論もその例外ではない。新しい金融現象の論議が近代経済学においてもマルクス経済学においてもいわゆる伝統的な金融学者以外の研究者によって行なわれることがふえてきているのは、そのことをしめしている。

本書の刊行にあたっては、いつものことながら池淵昌氏およびとくに直接に編集事務を担当された涌井義治氏にたいへんお世話になった。記して謝意を表したい。

一九七四年一〇月

著 者